

9 オリーブ生産振興の取組み

■ 土庄町、小豆島町 ■

(小豆農業改良普及センター 窪田健康、小林弥生、○豊嶋貴司)

●対象の概要

小豆管内では、本島の南側や豊島を中心に約141haのオリーブが栽培され、国内最大のオリーブ産地を形成している。

栽培者数は194戸で、経済栽培されている面積の過半は特定法人（平成15年のオリーブ振興特区の認定法人）、農業生産法人及び数件の大規模生産者（1ha以上）で占められている。

近年では、定年退職や島外からの移住によりオリーブ栽培に取り組む新規生産者も増加傾向にあり、将来の産地を支える担い手として期待されている。

●課題を取り上げた理由

オリーブは近年の栽培ブームと重なって、小豆島に限らず栽培面積は全国的に増加傾向であるが、国内需給量はまだまだ不足している。

このような中、小豆島においてもネームブランドに慢心することなく、トップブランドとして維持・発展を図るためには、面積拡大とともに生産者全体の技術レベル向上を図る必要がある。

一方で、オリーブは収穫に代表されるように手作業が多く大規模経営が難しいほか、新規就農者の増加に伴い生産者間の技術格差が生じ、果実品質にバラつきが発生するなど、技術的な課題がある。更に、産地拡大に伴うオリーブ果実の採油かす（残渣）の増大や、剪定した枝葉の処理など長期的に検討が必要な課題も多い。これら課題の解決が、安定的な産地形成および経営体の育成には不可欠であった。このため、県関係機関をはじめ町やJAと役割分担のもと、普及センターでは栽培技術習得の支援や現場の技術課題解決支援を行うとともに、増大する採油かすや剪定枝葉の利活用対策についても取り組むこととなった。

●普及活動の経過

- 1 チェックシート活用による個別巡回指導
生産者全体を対象とした栽培講習会は、年内

に、初心者とベテランに分けて行う技術研修会と、冬季の剪定講習会のあわせて3回、開催している。しかし、園地の特徴や生産者レベルは多様であり、一方的な全体講習会ではきめ細かな対応に限界があった。このため、個別指導を希望する生産者の巡回指導を開始した。これは、町を窓口希望者を募り個別にチェックシートを作成、主要な作業時期にあわせて年4回（開花後：6月、生理落果後：7月、収穫前：9月、剪定後：4月）、定期的に巡回指導を行うものである。



チェックシートによる個別巡回の様子

- 2 企業との連携による共同研究の実施
大規模経営で一番の課題は、収穫期の労力集中である。そこで、作業分散を主題としつつ新たな商材開発も目指した、環状剥皮による熟期促進試験に取り組んだ。この課題には、普及センター（栽培試験・調査）をはじめ、オリーブ栽培企業（試験ほ場提供、新商材開発）と県発酵食品研究所（オイル成分分析）が連携して対策チームを設置、かがわ農商工連携ファンド（かがわ産業支援財団）を活用し対応した（平成27～28年）。
- 3 剪定枝葉の有効利用
オイルの採油かすの有効利用方法としては、牛等の畜産飼料への転換を加速化させるが、剪

定時に発生する枝葉は、焼却・粉碎もしくは野積み等に限られ、適正処理が課題となっていた。

そこで、一般財団法人小豆島オリーブ公園（以下オリーブ公園）をはじめとした関係機関と連携し、数年間の試行錯誤の結果、安定した堆肥生産が可能となった。これにより、枝葉の堆肥化による環境に優しい循環型農業を支援した。



堆肥化プロジェクト検討会の様子

●普及活動の成果

1 生産者の技術レベル向上

全体講習会で基礎知識の向上を図るとともに、チェックシートによる個別巡回指導により、園地個々の状況把握と対策を施し、生産者に「気付き」の大切さを実感させた。

なお、永年性作物であるため、解決に複数年を要する課題も多いことから、次年度以降も継続して支援を行う。

2 労力分散と新商材開発のデータ蓄積

環状剥皮の実施時期と果実肥大・熟期促進等の効果確認を行い、ダメージが少なく肥大や熟期促進に最も効率的な時期を、ほぼ特定することができた。



剥皮処理試験の収穫果実比較（左が剥皮区）

なお、オイル品質の変化については、現在関係機関により調査中である。次年度も引き続き、より具体的な試験設計を組んで、実用化に耐えうるデータ収集を進める。

3 オリーブ堆肥を使った循環型農業の実現

材料となる剪定枝葉は、オリーブ公園ほか、町広報誌等で個別生産者および企業にも呼びかけ無償で引き取り、収集した。平成27年産は剪定枝葉約90m³分の堆肥ができ、その堆肥はオリーブ公園内のほ場で施用されたほか、苗木とのセット販売、堆肥を使った野菜づくり等への利用も検討されている。このほか、JA部会等を通じて、メロンやアスパラガスへの試験栽培も始まるなど、新たな付加価値商材づくりに向けて着実に動き出している。



堆肥の配布作業の様子

●今後の普及活動の課題

近年のオリーブブームも追い風となり、関係機関・団体等との連携による振興施策や各種取り組みにより、栽培面積は着実に増加している。オリーブは産業振興の面だけでなく、地域が抱える課題である耕作放棄地対策や新規就農対策にも一定の効果が認められることから、今後も継続的に取り組む必要がある。

一方、生産者の技術格差是正や大規模経営化に伴う労力分散、省力化技術、病虫害被害対策など不安定な生産面の課題はまだ多い。加えて収益性向上のため、6次産業化の推進も重要な課題である。

今後は、島内課題としての視点だけでなく、県全域の振興産業として、試験・行政機関との連携も強化していく必要がある。